

シリーズ

「地域と産業」第3回講演会

工場集積の変化から見えるもの

今回の講演会は「企業が来たいまちへ」をテーマに「産業都市尼崎」の再生を考えるため、尼崎の都市としての魅力やそれぞれの地域の魅力を探ることを目的として、平成17年3月3日に開催しました。

その中で、特に京都大学大学院助教授の吉田哲氏の基調講演でのお話の概要を紹介します。

●講師 京都大学大学院工学研究科助教授
吉田 哲



尼崎の現状

「尼崎、何か大変なんですよ」尼崎に来て、いろんな方に会うたびに言われます。工場がどんどん撤退し、空地が増えているということで、跡地には大規模小売店舗や流通施設ができています。尼崎市が置かれた状況と課題というのは、最初に答えからいくと、尼崎市内の工業地帯は、工場を立地する場所としてのコストが高くなり過ぎてしまったことです。そこから考え始めないかと。工場が立地して、モクモクと煙を吐き始めた頃というのは大阪から離れた郊外にあって、かつ、その頃は労働単価が安かった。だからこそ工場がたくさん立地することができたし、アメリカや発展した他の国に輸出ができた。ところが現在、それに対して大阪からの郊外と言われるような場所ではなくて、市街化が進んでまちなかに飲み込まれてしまった。

尼崎は阪神間の中央という一番良い場所にある。だから工場が操業し続けるには、少し場所が良い場所になり過ぎた。かつ、皆さんの給料は上がっていきますから、労働単価が高くなる一方で、それは他の国に食われていくであろう。それに素材型の製

造業というのは国内でどんどん集約されていくでしょう。そして一方で国外にも立地はどんどん転換していくでしょう。

今置かれている状況として、大規模な工場はどんどん減っています。大規模マンション、商業施設のカルフル等ができていますし、流通施設もどんどんできています。都市計画の根本というのはこういう商業系と住宅系、流通系と分けときましようというのがそもそもの発想のもとです。商業と工場ぐらいは横にあってもいいと思うのですが、住宅の横にこういう工場があると、都市計画をやる上では、そもそも混在を止めようというところから始まったはずなのに、そういうのが隣接してしまっている。

さらに大規模な空地が出来ていると、私の専門からいいますと、このまちの姿がどう変わっていくのか、その変化を都市計画などで、どう誘導すべきなのかを考える時期にきている。例えば、大きな空地に主として工場を集約して行ったりすることができるんじゃないか、空地のまま残して置くことは防犯上不安ではないのか、その辺が都市計画などの専門上興味あるところなのです。



大規模小売店舗と工場の隣接

素材型の工場というのは残っていけばいいのですが、おそらくこれは、製造工程をかなり改修したり、いろんな努力をされて残っていく所も当然あると思います。しかし、撤退している工場があるのを見ると、残る工場は全部じゃない。全部の工場が無くなることはおそろくないのですが、残っていくのも少数例になっていくのではないかと見ております。

また、ITが家電化していくなかで、何年か単位の短期契約型で、3年や5年、5年でも長いかなと思うのですが、大規模な貸工場というのが、これから工場の使い方として出てくるのじゃないか。プラズマディスプレイの工場でも、何年かで採算をとったら撤退するのじゃないかと考えるのですが、こういう工場がどんどん出て来るだろうと思います。

つまりこれから、ある工場が建ち続け、同じ物を作り続けるというようなスタイルは、これからは多分ないのじゃないか。作るものが時々変わる、その工場を操業している会社もその時々で変わるというような工場というのは、これからどんどん出て来るはずで、そういうものを支援する制度であったり、支援するあり方、その時々で契約とか系列の関係が変わるような工場というのは、これから出て来るのじゃないだろうかと思います。



松下プラズマディスプレイ工場

素材型産業のための インフラは整っているけれど

いろんな委員会に出ますと「尼崎、便利ですよ」というところで議論が終わります。それがあから安心と。確かに大阪、神戸、いろんな街に隣接しているので便利だろうって、そこで皆さん思考が停止してしまうのです。皆さんどういうわけか。じゃ隣接していることによって何が便利なのかを考える手前で話が止まってしまう。すでに整備されたもので便利なものと言えば、工業地域の幹線道路、つまり素材型の工場で作った製品を出荷するのに便利なような幹線道路が、すでに整っている。上下水道、電気など、工場を操業するのに必要なものはひとつとあります。これは全部、素材型の製造業のためのインフラです。これは確かにメリットですが、その整備されたもの、すでにあるもので何が出来るのか。

例えば新しい研究所なり、新しいテーマに特化させたような工場街などを作るとしたら、今のタイミングで、何をやるのかと。そのための先見性があるのか、先行投資として、やっとなければならないのは一体何だろうかと。これを考えると情報幹線などの整備は進んでいるのでしょうか。

それから尼崎市の全体では、いろんな業種があると思いますが、こと南部の臨海部に限って言えば、いろんな業種が隣接し合っているかと言えば必ずしもそうではありませんし、ベンチャー企業で働く人にとっての利便性はおそらく低いといわざるを得ないでしょう。

じゃあそういうマイナス要因を抱えて、例えばIT産業を呼べるかと言うと、なかなか厳しいのじゃないかと思えます。それに先見性の点から言うと、ITは今、一番のベンチャーであっても20年から30年先を見据えた先のベンチャーではないと思われま。それから優遇制度を作るにしても、ベンチャー型の産業を呼ぶには少し敷居が高いのではないかと思います。

京阪神間の交通の 結接点であることを生かすには

尼崎市は産業振興では、例えば企業立地促進度が昨年（2004年）10月にできています。それを支援する制度や技術はすでにたくさんあるのです

が、もっと便利な点とは何かと考えると、尼崎は阪神間の交通の結接点で、名神に乗って来るときに入り易いとか、和歌山からでも京都からでも茨木からでもアクセスしやすく、大阪市内に入るよりも便利なんです。

近在の消費人口では、宝塚、西宮、豊中、茨木、そのあたりの人が、ちょっと車で乗って来るのには便利な場所にあります。

それから、たくさんの空を抱えていると、流通施設がたくさんできていますという話を、尼崎に来る時によく聞くのですが、ついに外資系でAMBブラックパインの流通センターというのができています。



AMBブラックパイン

こういう企業が目をつけるだけに、尼崎は便利のよい場所のはずなのです。何か立地について調査をすると、ここほど便利な所はない、というのは企業さんや、皆さんが考えることだと思います。

トラックが来るだけではなくて、やっぱり港からの積み出しもできる。皆さんもご存知だと思うのですが、港湾を使ったターミナルもあります。

そういう流通の基地であるということは、近在の街へ行き易いということです。



ダイハツ積み出し基地

食材関係の工場、配送センターが出てきているのを見ても近在の街に運び易い、鮮度のよいうちに運ぶことができるという点で尼崎は便利な場所だと、皆が考えていると思うのです。



ハークスレイ (ほっかほっか亭) 食品工場

市外から人がやってくる

それから和歌山からでも京都からでも買いにやってくるという話したのは、ランボルギーニのことです。これを本当に買いに来る人は、そんなにたくさんはないと思うのですが、和歌山からでも京都からでも、やっぱり来るのです。見に来るだけの人も多いと思いますが。



ランボルギーニ販売会社

ドゥカティというのはイタリアのオートバイの会社なのですが、これは西宮にあります。尼崎にあるのではないのですが、これそのものを買に来る人も少ないかも知れませんが、見に来る人は多いはずなのです。見に来る人たちを、それだけで帰らせてしまうのももったいないように思えます。またこういう外車の部品をつくるような工場がまわりであって

もいいと思います。

これまでの尼崎というのは、製品の原材料を船や高速道路を使って、工業地帯に持って来て、それを加工して製品を出荷する。そういう街だったと思うのです。ところが今少しずつできているお店などを見ても、ドゥカティだとかランボルギーニだとか、ああいうのは製品としてもってこられて、それを買いにとか見に来るから人がやって来る。工場が用途転換していく中で消費者を呼べる利便性（尼崎に来やすい）を有していることで、街自体がかわっていく可能性をもち始めたということです。尼崎は「人をすでに集めている」ということを、皆さん知っておられるかどうか。もっとそういう人たちをターゲットにしたようなことを何か、始められてもいいのではないかと、部外者ながら思うのです。



ドゥカティ販売会社

また、消費型の施設利用誘致ができるのではないのでしょうか。特に消費型の施設を作る時に必要なのは、特にミニバンが止められる大規模な駐車場、これがないと人は集まりません。家族連れにしても、そうでなくとも、若い人も最近、デカイ車に乗りますもので。工場の跡地というのはそれが可能なのです。

大阪に住んでいる知り合いの、子どもがいる友人たちに聞くと、「尼崎ぐらいに、こういう便利なのがいっぱいあると行くんやけどなあ、何もなし、何でもないんやろな」と、「工場に似たようなものは次々できるし、流通施設はできるけど、何かないねん、あそこにこんなものがあってくれたら…」という話をよく聞くのです。一つの例としてスーパー銭湯が、工場の跡地にできていると聞いています。こういうのがやっぱり尼崎市内以外の所から人を集めているはずなのです、すでに。



極楽湯

以上が尼崎の産業とか、そういうものに対する私なりの感想なのですが、さらに建築や都市の専門家として、どんなことを考えているか、ここが私としては一番興味深い話なのですが、街の風景として、捨ててしまった景色という意味で『棄景』という言葉があります。工場の跡地には、便利な大きなものができるんですが、なりふりかまわぬローコスト化をしまして、それが景色をつまらないものにしている。それを誘導する仕組みなり、何かないやろうかと感じています。工場は煙を吐くから棄景と呼ばれていたのですが、用途が変わっても放っておいたままで、いろんなものが建つと、また棄景になっていくのではないかと危惧します。「それはもったいないなあ」と思うのです。少しの工夫でいい、立派なものを作らなくてもいいと思うのですが、そういう仕組みとか、誘導みたいなことがあってもいいのではないかと考えています。

そして新しく大きい便利な施設ができたとしても、やはり歩いて行ける場所なのか、バスに乗って行けるのかというと、現在臨海の工業地帯は全然そういう場所にはなっていないのです。ただ緑道とかが工場のわきに整備されているのですが、なんとも寂しい場所です。

ああいう所にお店や軽食ぐらい食べる場所を作らないとアカンのではないかと、何か少しずつ歩いて行ける場所が先へ延びて行かないと、車で行く人以外は来ないでしょうし。いろんなものができたから、それを整備するというのではなくて、先行投資として、そういうのをやっていく可能性はないだろうかというようなことを建築や都市の専門家としてそんなことを考えます。何かその中で計画したり設計したりお手伝いしてみたいとも考えています。

今は、空いた土地を尼崎は主として、どんな風に使って行くのか。どういう風に使えば近い将来良い場所になる可能性があるのか、ということを考えていく良い時期ではないかと考えています。